

# “すばらしきみえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2019.2  
208号

■特集／明治邂逅～三重の近代建造物

●いま、グループネット／早田漁師塾 ●みえを歩こう／伊勢市 二見町



特集

# 明治邂逅かいこう〜三重の近代建造物

1868年――。

260年余り続いた江戸時代が  
終わり、新たな時代が幕を開けま  
した。その名は、「明治」です。

時の新政府は、さまざまな近代  
化政策を打ち出しました。教育・  
郵便・鉄道などの事業が進むに  
従って、西洋風の近代建造物が建  
てられるようになりました。

現在、三重県内を歩くと、美し  
い洋風建造物に出合うことがあり  
ます。（一部、愛知県犬山市へ移  
築）これらの中には、一見すると  
洋風ですが、伝統的な日本古来の  
技を使っているものも見られます。  
また、見えない部分にまで凝った

細工が施され、当時の職人たちの  
気概きがいが伝わってくるようです。

時は流れ、元号も明治から大  
正・昭和・平成へと変遷しまし  
たが、近代建造物は、各時代の目撃  
者ともいえます。本年5月1日か  
らは、新たな元号が始まります。  
この機会に、近代建造物に合いに  
行ってみてはいかがでしょうか。

\*各建造物の見学方法・料金および、関連す  
るイベント・祭りなどの開催日時などはそ  
れぞれ異なりますので、必ず事前にご確認  
ください。

\*三重県内には、ほかにも明治・大正時代に  
建てられた建造物が多く存在します。ここ  
で紹介したのは、ほんの一例です。

取材・文……中村真由美  
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から  
提供していただきました



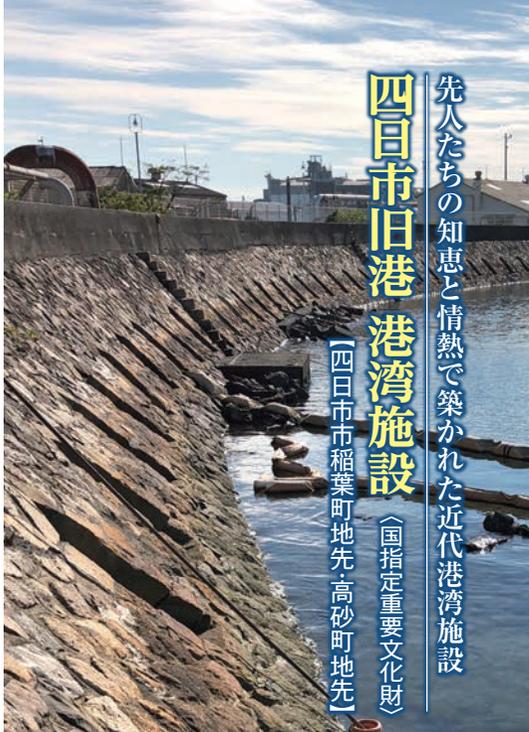
2 「旧三重県庁舎」外観（愛知県犬山市「博物館明治村」）

先人たちの知恵と情熱で築かれた近代港湾施設

## 四日市旧港 港湾施設

〔国指定重要文化財〕

〔四日市市稲葉町地先・高砂町地先〕



〔潮吹き防波堤〕

3年から12年もの歳月をかけて事業を成し遂げました。しかし、その後の暴風雨や台風によって防波堤が破損したため、同26(1893)年から翌年にかけて、三重県と当時の四日市町によって、改修工事が行われました。

をあげた服部 長七(1840～1919)が関わって行われました。世界的にも珍しい「潮吹き防波堤」の構造は、旧港内にある「稲葉翁記念公園」に設けられたレプリカで確認することができま



〔潮吹き防波堤〕レプリカ

中部圏を代表する国際貿易港として発展し続け、近年は工場夜景のスポットとしても注目を集める四日市港には、周囲の景観とは趣が異なる一画があります。真つすぐ突き出た防波堤と、湾曲した防波堤が目を引く「四日市旧港」です。防波堤はいずれも石積みで、長年の風雪に耐えた風格が漂います。

これらの近代港湾施設の原型を整えたのは、地元の廻船問屋、稲葉三右衛門(1837～1914)でした。三右衛門は、私財を投じて、明治6(187

湾曲した方の防波堤は、この改修によつて、高さ3.7メートルの小堤と高さ4.7メートルの大堤が並行する二列構造になりました。その仕組みは、港外からの波を小堤で受け止め、小堤を乗り越えた波については、大堤に開けられた潮吹き穴から港内に吹き出すという独創的なものでした。そのため、「潮吹き防波堤」と呼ばれます。なお、改修工事には、土木技術者のオランダ人、ヨハネス・デ・レーケ(1842～1913)や、全国各地の大規模土木事業で功績

績を称えた「稲葉三右衛門君彰功碑」や防波堤改築を記念して建てられた「波止改築記念碑」などを眺めていると、四日市港発展の礎を築いた先人たちの熱意が伝わってくるような気がしました。



〔波止改築記念碑〕

お問い合わせ

四日市港管理組合振興課

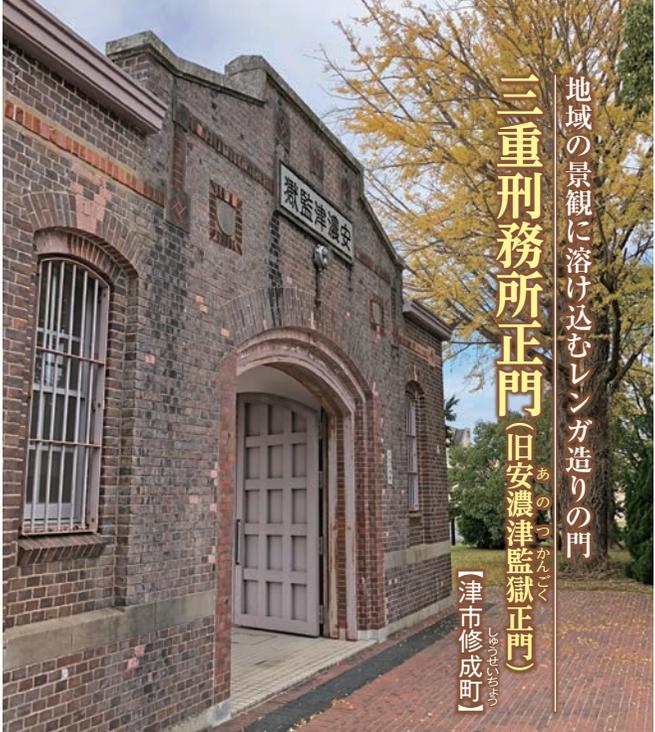
TEL 059-366-7022

地域の景観に溶け込むレンガ造りの門

## 三重刑務所正門(旧安濃津監獄正門)

〔旧安濃津監獄正門〕

〔津市修成町〕



〔旧安濃津監獄正門〕

高圧的なイメージよりも、温もりや親しみを感じます。

「旧安濃津監獄正門」が建てられたのは、大正5(1916)年のこと。それ以前は、旧久居藩の米倉を改修した施設を使用していました。が、現在地に移築した際に、庁舎や倉房などと一緒にレンガで建てられました。



受刑者が制作した和紙便箋

津市の市街地を流れる岩田川に沿って歩くと、高い塀を巡らせた一面に気がきます。「三重刑務所」です。正面入口から入ると、イチヨウなどの大木が生い茂る中に、レンガ造りの建物が現れました。幅は約10メートル、奥行は5メートル程度。中央の扉の上に「安濃津監獄」の文字が見えるものの、随所に施された飾り模様などを眺めていると、

大正11(1922)年に「三重刑務所」と改称した後、度重なる自然災害などによつて各建物が順次改築され、当時の面影を残すのは、この門のみとなりました。解体の話もありましたが、地域の人々の要望で、保存が決まったのです。現在、受刑者たちは一日も早い社会復帰をめざして、日々を過ごしていますが、その一環として木工・印刷・

洋裁・金属などの作業を行っています。入口脇に建つ「刑務所作業製品」販売所(土・日・祝日定休)を覗いてみると、パーベキューコンロやぬれ縁をはじめとして、伊勢型紙模様

の和紙便箋や組みひものストラップ、伊勢木綿のハンカチーフ・ブックカバーなど、三重県の伝統工芸品も並びます。制作に熟練の技を要するものも多く、丁寧に一つひとつ手作りしている様子

お問い合わせ

三重刑務所

TEL 059-228-2161

文化施設が揃う上野城下の象徴的存在

# 三重県立上野高等学校・明治校舎

〔旧三重県第三尋常中学校校舎〕

〔県指定重要文化財〕

〔伊賀市上野丸之内〕



〔三重県立上野高等学校・明治校舎〕外観

三重県内に残る唯一の藩校建築「旧桑田堂（国指定史跡）や、現存する小学校校舎として県内最古の建築「旧小田小学校本館」（県指定重要文化財）などが揃う伊賀市市街地を散策していると、グラウンドの奥に建つ白い木造校舎が目にとまることが多いでしょう。飾りの付いた玄関ポーチや規則的に並ぶ窓などが、ひととき華やいで見えます。「三重県立上野高等学校」の明治校舎です。

同校の歴史は、明治32（1899）年に「三重県第三尋常中学校」として設置されたことに始まります。ただし、同年に尋常中学校が中学校と改称されたため、開校した際には「三重県第三中学校」と称しました。なお、当時の中学校は、現在の中学校と区別するために「旧制中学校」と呼ばれます。



開校当時の様子\*

でしたが、翌年の同33（1900）年に、現存する明治校舎を含む新校舎が完成。設計・創設工事全般を主に担当したのは、清水義八ぎはちでした。三重県内務部に所属していた義八は、現在、愛知県の「博物館明治村」に移築されている「旧三重県庁舎」をはじめとした公共施設を数多く担当したことで知られています。見比べると、玄関周囲のデザインや全体の雰囲気似ていることに気付くでしょう。

伺い、お邪魔してみました。すると、まず驚いたのは、天井の高さと各教室の重厚な扉です。天井に施された菱型模様まじりの意匠などを見ると、校舎というよりリゾートホテルのような雰囲気まじりで、優雅な気分になります。また、扉の上部は開閉可能で、風通しもよさそうです。職員に話を聞くと、夏の涼しさは格別だと教えてくれました。

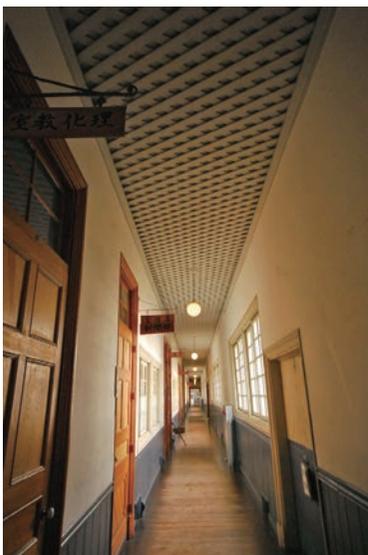
真つすぐ延びる廊下を歩いていると、「同窓会 文庫展示室 横光利一資料」の文字に気付きました。横光利一（1898～1947）とは、大正時代から昭和時代前半にかけて活躍した小説家です。真つすぐ延びる廊下を歩いていると、「同窓会 文庫展示室 横光利一資料」の文字に気付きました。横光利一（1898～1947）とは、大正時代から昭和時代前半にかけて活躍した小説家です。

## お問い合わせ

「三重県立上野高等学校」事務局  
TEL 0595-21-2550



華やかな装飾が施された玄関ポーチ



真つすぐ続く美しい廊下

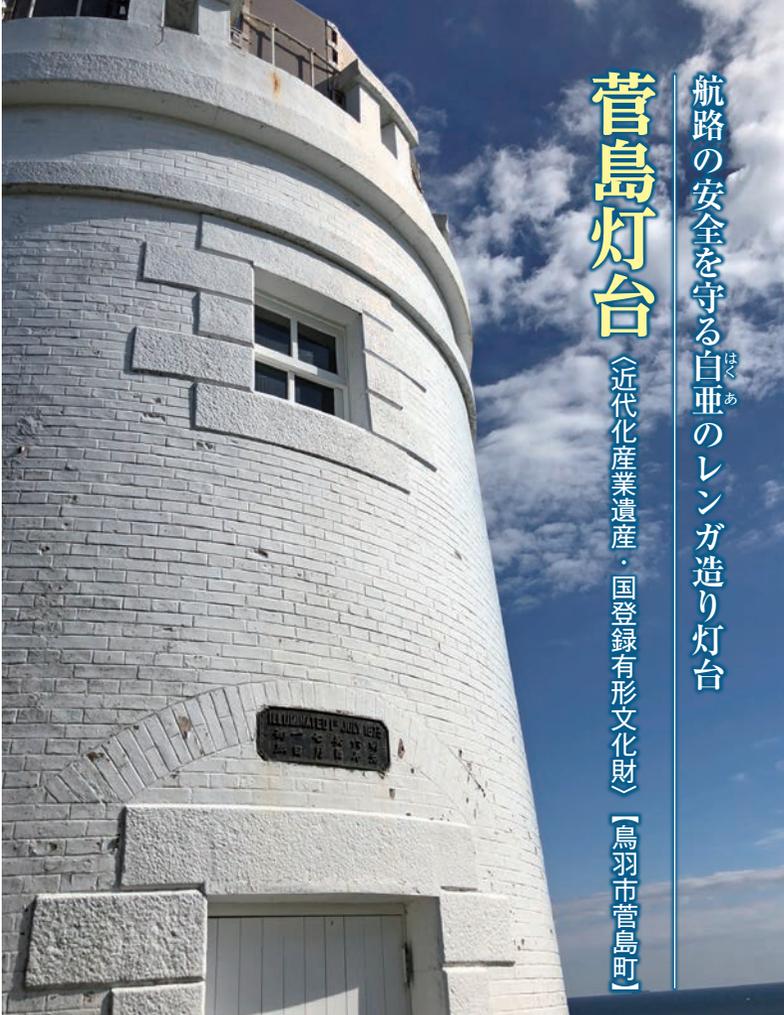


正門脇に建つ横光 利一の記念碑

\*印の写真は取材先から提供していただきました

# 菅島灯台

〔近代化産業遺産・国登録有形文化財〕〔鳥羽市菅島町〕



「菅島灯台」外観

「三重県への本格的な近代建築技術の導入は（中略）灯台の建設に始まる。日本近海の航路の安全性を確保するための灯台整備は、安政の開国以来、最も緊急を要した近代化諸政策の一つである。」

『三重県史 別編 建築』に記されたとおり、県内でいち早く誕生した近代建造物は、灯台でした。明治5（1872）年に現在の志摩市阿児町に「安乗埼灯台」、翌年には鳥羽市の菅島にレンガ造りの「菅島灯台」が点灯しました。『鳥羽

市史』によれば、竣工式には「当時参議であった西郷隆盛以下政府の高官も多数列席し挙行された」といわれます。なお、「安乗埼灯台」は当初は木造でしたが、昭和23（1948）年に鉄筋コンクリート造りに建て替えられています。小春日和のある日、「菅島灯台」を訪ねて、「鳥羽マリナターミナル」から鳥羽市営定期船に乗り、菅島へ向かいました。島に上陸した後は海岸に沿って東へと延びる遊歩道「しろんご海道」を歩きます。磯の香りと時々聞こえるさざなみを楽しみながら進むと、約30分であつた西郷隆盛以下政府の高官も多数列席し挙行された」といわれます。なお、「安乗埼灯台」は当初は木造でしたが、昭和23（1948）年に鉄筋コンクリート造りに建て替えられています。

リス人であることから、採用されたのでしよう。また、レンガは志摩市内の土を使用し、現地の瓦製造職人が造ったと伝わります。灯台を管理する鳥羽海上保安部では、当時のレンガ2枚を保存しており、交通課長の下畑伸介さんのご厚意で見せてもらうと、漢字や数字に加えて記号のようなものが刻印されていました。おそらく、製造者を特定するための目印なのでしょう。職人たちが自分の仕事に責任と誇りを

化しています。また、灯台手前には同じくレンガ造りの附属官舎があり、係員が常駐して灯火管理を行っていましたが、昭和34（1959）年に自動化されたことで、無人となりました。この官舎（国指定重要文化財）は、現在は愛知県大山市の「博物館明治村」に移され、内部を見学することが可能です。一方、灯台内部は、普段は非公開ですが、「しろんご祭り」が行われる7月11日直近の土曜日に一般公開されます。

「しろんご祭り」とは、同島に伝わる海女の伝統神事で、白髭神社に奉納する「まねき鮑あわび」を求めて海女たちが競い合います。白い磯着いそぎに身を包み、伝統を守り伝える海女たちと、146年もの長い間、行き交う船の安全を見守り続ける白い灯台。どちらも後世に残したい、貴重な遺産です。

## お問い合わせ

鳥羽海上保安部交通課  
TEL 0599-125-2303

灯台の基本構造は当時のままですが、当初の落花生油ろうかせいを使用した二重芯ランプが、現在はLEDになるなど、光源などは時代に応じて進



鳥羽海上保安部が保存する「イギリス積」で積み上げられたレンガ



かつての「菅島灯台」と附属官舎の様子※



現在の「旧菅島燈台附属官舎」外観（「博物館明治村」）



「しろんご祭り」※

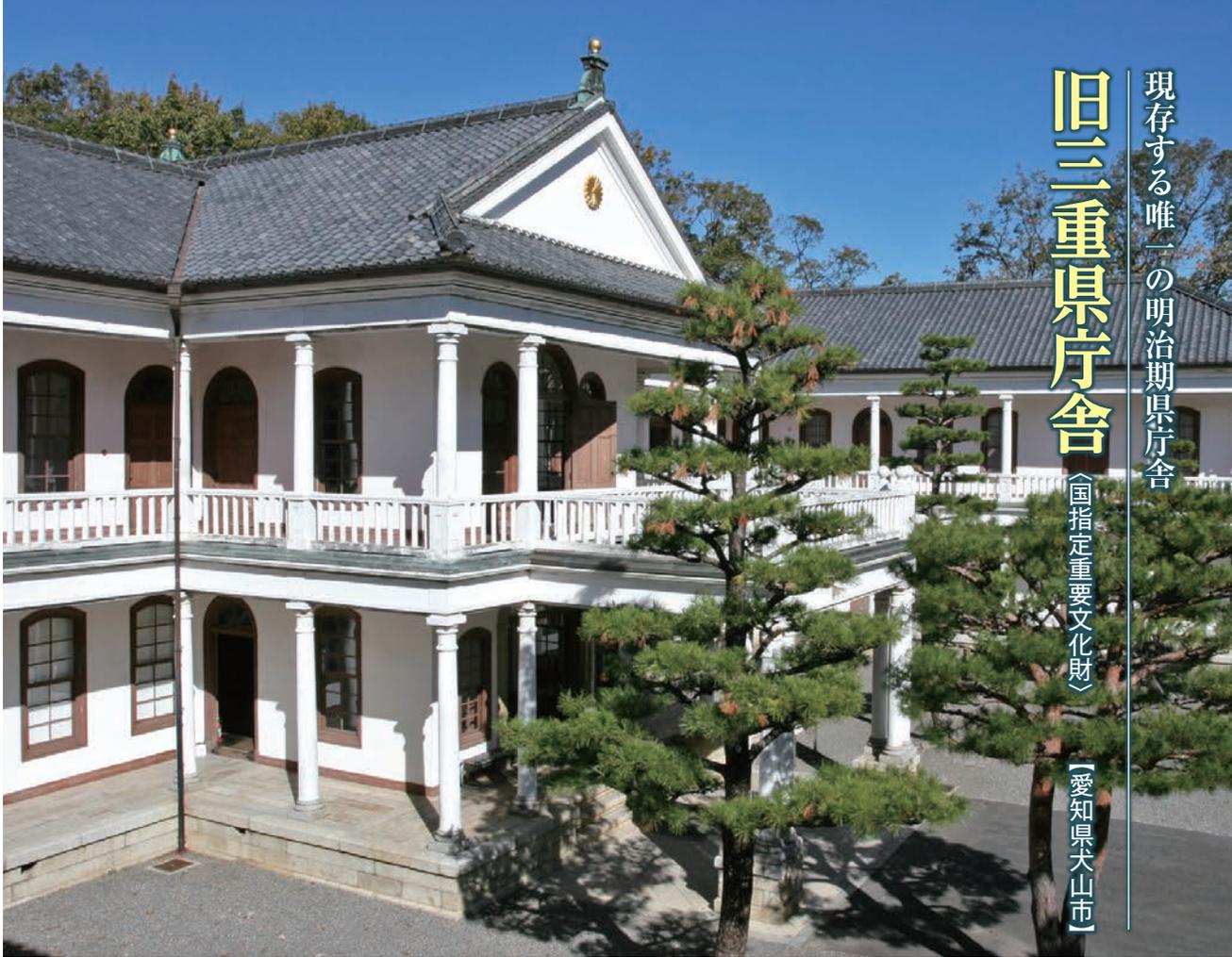
※印の写真は取材先から提供していただきました

現存する唯一の明治期県庁舎

# 旧三重県庁舎

〔国指定重要文化財〕

〔愛知県犬山市〕



「旧三重県庁舎」外観

カラな二階建洋風の堂々たる庁舎で、地方から弁当持参で参観する人が絶えなかったといえます。その後の近代建築の定着に大きく影響し、県民にも長く親しまれた庁舎でしたが、昭和41(1966)年に「博物館明治村」へ移築されました。

菊の花が咲き誇るころ、「旧三重県庁舎」に合うために「博物館明治村」を訪ねると、全国各地(一部は海外)から移築された明治時代(一部大正時代を含む)の建造物が出迎えてくれました。その数は60余りで、見ごたえがあるものばかり。一步、足を踏み入れただけで、明治の空気に包まれたような気分になります。

「旧三重県庁舎」は、正門から入ってすぐにあります。中央の玄関を挟んで廊下がE字型に広がる様子は、想像以上の規模ですが、全体的にはスッキリ

リした印象です。また、屋根の形などを見ていると、和風建築の要素も感じられます。こうした様式は、幕末から明治時代初期にかけて建てられた公共建築に多く見られ、「擬洋風建築」と呼ばれます。

内部では、明治20(1887)年に改築された知事室などが再現されているほか、明治時代の三重県の風景を撮影した写真や、「桑名萬古焼」や「伊勢根付」などの伝統産業製品が常設展示されています。また「明治時代の時計」を展示する部屋では、日時計が目に残りました。これは、かつて鳥羽市の菅島に



再現された知事室



日時計

江戸時代の幕藩体制から、中央集権国家づくりへと大きく舵を切った明治政府は、明治2(1869)年に「版籍奉還」、同4(1871)年には「廃藩置県」を行いました。前者は、各藩が治める土地と人民を天皇に返還させる政策のこと。後者は、全国の藩を廃止して中央が管理する府と県に置き換えるというもので、政府が任命した府知事・県令が各府県に派遣されました。江戸時代の終り、三重県域には津藩など12の藩領と、天領(江戸幕府直轄の領地)・旗本領・伊勢神宮領がありました。その後、安濃津県と度会県となり、安濃津県の県庁所在地移転に伴う県名の変更などを経て、現在の三重県に統一されたのは、同9(1876)年のことでした。この時の三重県庁舎は、旧津藩の藩校「有造館」を使用していましたが、手狭なために新庁舎が計画されました。場所は、現在の「県庁前公園」二帯で、完成したのは、同12(1879)年でした。「津市史」によれば「当時としては、ハイ

お問い合わせ  
「博物館明治村」  
TEL 0568-6710314

「博物館明治村」で明治時代の三重県に出会う

## 宇治山田郵便局舎(旧伊勢郵便局舎)(国指定重要文化財)

## 旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校(愛知県犬山市)



「宇治山田郵便局舎」外観



「公衆溜」上部

「博物館明治村」では、「旧三重県庁舎」や前述の「旧萱島燈台附属官舎」以外にも「宇治山田郵便局舎」「旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校」と出合うことができます。

「宇治山田郵便局舎」は、伊勢神宮外

宮前の角地に明治42(1909)年に「山田郵便局(後に『伊勢郵便局』に改称)」の局舎として建てられました。その外観は独特で、入口を中心としてV字型になっているのがわかります。内部の構造はさらにユニークで、入口から入ってすぐの空間が「公衆溜」と呼ばれる円形ホールとなっていて、高窓から柔らかな日の光が降り注ぐ様子は、絵画のような美しさです。なお、本年1月から2022年10月予定までは改修工事のため、見学は不可となっています。

一方、「旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校」が最初に建てられたのは、現在の津市内で、明治21(1888)年のことでした。当時の役割は、小学校教

師の養成を目的として設置された尋常師範学校の本館でした。「津市史」は「当時としては、県庁舎とともに、県下の偉観であった」と評しています。

その後、昭和3(1928)年に現在の名張市に移築。「蔵持小学校」として、子どもたちの成長を見守り続けましたが、同48(1973)年に「博物館明治村」に中央玄関部分と右側の2教室部分が移されました。

春の兆しに誘われて「博物館明治村」を訪ねれば、かつて三重県内に存在した建造物たちが、思い出話を語ってくれるかもしれません。

### お問い合わせ

「博物館明治村」

TEL 0568-67-0314

尾鷲の街並みに花を添える瀟洒な洋館

## 土井本家住宅



「尾鷲市朝日町」

土井本家住宅外観



ヤシの大木などが並び立つ庭

最も早期に属し、「上層住宅建築の代表的な例」と記します。

現在、内部は非公開ですが、敷地内の蔵の一部を「土井子供くらし館」として公開(予約制)しており、その際に外

JR「尾鷲」駅から東へ15分程度歩くと、ひととき背の高いヤシの木が目を引き一画が現れます。ここは、土井本家です。土井家と尾鷲市の関わりは、寛永年間(1624~1644)の末頃に始まるといわれます。代々山林経営を家業とし、宝暦4(1754)年には大庄屋となりました。「尾鷲市史」は、「経済的にも社会的にも尾鷲地域における

第一人者となった」と紹介しています。同敷地内へ入ると、美しく手入れされた庭

の奥に、2階建ての白い洋館が姿を現しました。玄関ポーチに施された飾り模様は優美そのもので、思わずため息が出ます。2階部分のバルコニーからは、今にも中世ヨーロッパの貴婦人が姿を現しそうです。この洋館が完成したのは、明治21(1888)年ごろのこと。「三重県史 別編 建築」は、「和洋館を併設した住宅としては三重県内で

観を見学することが可能です。同館内には、明治大正時代の子どもたちが遊んだ玩具や文具、衣類などが展示され、当時の子どもたちの息遣いが聞こえてくるようです。

貴重な玩具の数々や白い洋館を間近にすれば、心ときめくことでしょう。

### お問い合わせ

(有)土井林業

TEL 0597-22-0006



「土井子供くらし館」外観



「旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校」外観

# 早田漁師塾

過疎・少子高齢化が進む尾鷲市早田町で、早田らしい文化や伝統、豊かな海を残そうと、平成21年に「ビジョン早田実行委員会」が結成されました。その中で、漁業者部会が中心となってスタートさせたのが「早田漁師塾」。平成29年までの間に市・県外から9人の塾生を受け入れ、3名が市内で漁業に従事しています。



小型定置網漁※

## お問い合わせ

「早田漁師塾」  
尾鷲市早田町6-3  
(三重外湾漁業協同組合  
紀州支所 尾鷲事業所早田内)  
TEL 0597-29-2039

今回、お話を伺ったのは、「早田漁師塾」を運営する「三重外湾漁業協同組合 紀州支所 尾鷲事業所早田」主任の湯浅 光太さん。昨年秋季に実施された同塾で学ぶ、7期生の江川 正樹さんと小池 満さんが、ロープワークを受講する様子も拝見しました。

「早田漁師塾は、市外や県外にも門戸を開いていると聞きました。」

湯浅：早田町は、黒潮が流れる豊かな海を背景に、大型定置網漁(大敷)・小型定置網漁(小網)・イセエビ刺し網漁などが盛んに行われてきたところです。大型定置網漁では、ブリをはじめとし

て、サバ・アジなどが獲れます。しかし、過疎・高齢化が続く今のままでは、早田らしい伝統ある漁業を維持・継続することが困難になるのは確実です。そこで、漁業に興味のある若者を市外や県外からも募集して、担い手になってもらおうという想いで始めたのです。

「塾生たちは、1か月かけて伝統漁法を学ぶわけですね。」

湯浅：伝統漁法を実際の現場で体験するのはもちろんですが、たとえば、漁網の修繕方法や魚のさばき方、漁業にまつわる法律や資源管理についてなど、基礎知識全般が身に付くようになっていきます。さらに、早田町ならではの風習・習慣なども学び取ってもらい、地

域に溶け込んでもらうことを目的としています。

「その想いが実って、現在、3人が市内に定住していますね。」

湯浅：募集する時点で、生涯、三重県内で漁師として生きる覚悟があること、地域行事に参加できることなどを条件にしていますから、本気の人だけが来ます。3人のうち、1期生の吉田 元治さんと3期生の浦和弘さんは、新人塾生のロープワークの指導も担当しています。2人は、新人たちが何に戸惑うかが理解できているので、指導を受ける方も安心できるようです。

「なるほど…。ところで、漁師塾は他の地域でも実施されているのですか。」

勢市出身の小池さんは、先輩漁師について「船に乗ると、急に変わるんです。カッコいいなあ」と語ってくれました。日に焼けて、少したくましくなった2人と先輩漁師の姿は、早田町の海のように輝いて見えました。

インタビュアー…中村真由美

取材終了後、江川 正樹さんと小池 満さんは、「株式会社 早田大敷」で働き始めました。

湯浅：早田町と同時期に「畔志賀漁師塾」(志摩市の畔名・志島・甲賀合同の取り組み)もスタートしています。三重県全体の漁業者(正組合員数)は、平成27年現在で約5800人ですが、10年後には約3000人にまで減少することが考えられます。そのため、漁師塾のような取り組みが広がっていけば、と考えています。

「ありがとうございます。」  
お話の後、ロープワークを学ぶ様子



三重県の漁業などについて学ぶ塾生※



大型定置網漁※



ロープワークを学ぶ塾生たち



後列向かって左から湯浅 光太さん、吉田 元治さん、浦和弘さん。前列は7期生の江川 正樹さん(左側)と小池 満さん(右側)。

※印の写真は取材先から提供していただきました



みえを歩こう

## 西行が愛したまち 二見浦

# 伊勢市二見町



昨年10月に上演された、西行演劇「命なりけり～西行、覚悟の旅立ちⅢ」キャストの皆さん※

古くから名勝地として知られ、伊勢神宮とも関わり深い二見浦には、多くの文人墨客が訪れ、さまざまな和歌や俳句などが生み出されました。その中で忘れてならないのが、西行(1118～1190)です。平安時代末期の歌人として知られる西行は、晩年の約6年間に二見の山寺で過ごしたのです。その具体的な場所は長い間不明でしたが、近年の発掘調査により、徐々に明らかになりつつあります。

平成25年、地域の有志たちが「二見浦西行実行委員会」(奥野雅則委員長)を結成。昨年秋季には生誕900年イベント「そこに西行がいた!! 西行が愛したまち二見浦」が盛大に行われました。今回は、西行の足跡を求めて、風光明媚な二見浦周辺を巡ります。

取材・文：中村真由美

## 「二見浦」の正式名称は？

「二見浦の読み方をご存知ですか?」 今回の散策の起点、JR「二見浦」駅で問いかけられ、一瞬戸惑います。正解は「ふたみのうらだ」と聞いて驚きました。古くから和歌などで詠まれていたのを根拠として、JR参宮線が鳥羽まで延長された際に、正式決定したのです。駅舎名のローマ字も確かに、「FUTA MINOURA」となっていました。

意外な事実を知った駅舎を後にして南へ向かいます。すると、住宅街のほぐれで案内板に気付きました。伊勢三郎伝承が記されています。伊勢三郎(1186)とは、源義経(1159～1189)に仕え、源平の合戦で軍功を挙げたとされる武将のこと。近くの江地区で生まれたともいわれ、「硯岩」と呼ばれる大きな岩のくぼみに湧く水で、手習いをしたと伝わります。

「現在『硯岩』を見に行くのは大変ですが、三郎が力試しに投げたという『力



「力石」



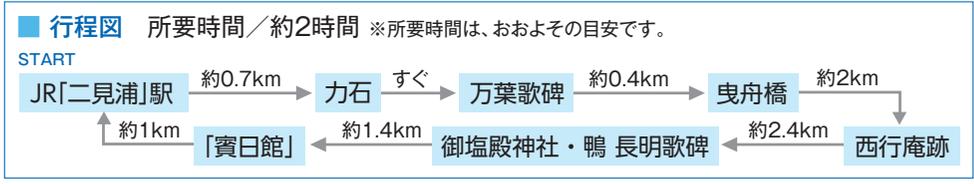
曳舟橋手前周辺の田園風景



万葉歌碑



今回の案内人は二見浦西行実行委員会事務局長の角谷泰弘さん。「名勝二見浦保存管理計画運営委員会」や「伊勢市二見町茶屋地区景観委員会」の委員も務めます。



石」が近くにありますが」との案内で先に進むと、草むらの中にある大きな石が目にとまりました。地域では男の子が生まれると、「三郎のように学問に励んで、こんな石を投げられる偉い人になるんだよ」と諭したといわれています。

## 伊勢の浜荻

「力石」を過ぎ、五十鈴川派川に架かる曳舟橋の手前辺りまで来ると、目の前に田園風景が広がります。

鎌倉時代までは、この辺り一帯を雄大な五十鈴川が流れていました。船が行き交い、三津湊と呼ばれていました。

西行さんもこの湊を利用しています」と角谷さん。お話によると、現在の五十鈴川派川の方が本流で、その川幅は300メートルもあったといわれています。しかし、明応7(1498)年の大地震で、周囲一帯の地形が様変わりしたのです。また、周辺には葉が片側にのみ付いている片葉の葦が群生し、伊勢の浜荻の名で知られていました。奈良時代に成立した『万葉集』には「神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝休らむ荒き浜辺に」の歌が収められ、近くには、その歌を刻んだ万葉歌碑がたたずんでいます。

## 西行の庵跡へ

万葉歌碑に別れを告げて、発掘調査の結果、西行が庵を結んでいたと推定される場所をめざします。

鳥羽院の「北面の武士」(院の御所の北面にあつて、院中を警護した武士)だった西行(佐藤 義清)は、23歳の時に突然出家した後、東北各地への旅を経て、高野山で日々を過ごしていました。その西行が二見浦に住むことになったのには、都での騒乱などが理由に挙げられます。いずれにしても、西行を師と仰ぐ、伊勢神宮神官たちとの交流や、二見浦の美しい景観に心慰められたことでしょう。

西行と二見浦との関わりを示す案内板は、宅地造成が進む光の街の一角に立っていました。そこには、平成4年から翌年にかけて行われた発掘調査で、墨書された木製品などが多数出土した遺構の年代が、12世紀第3四半期から13世紀前葉までのものであることから、西

に則つて続けられているのです。また、歌碑は鳥居の向かい側にありました。「二見がた神さびたてる御塩殿幾千代みちぬ 松蔭にして」の歌には、同神社の神々しさに感動した気持ちが表現されています。

### 「寶日館」

「発掘調査で出土した木製品などは『寶日館』で常設展示しています。ぜひ見てください」との案内で、海岸沿いを東へと歩きます。松並木が続く道には、



鴨 長明歌碑



西行歌碑

「浪(なみ)越すと 二見の松の 見えつるは 梢にかかる 霞なりけり」



「寶日館」



馬が描かれた木製品

西行歌碑や芭蕉句碑などが点在し、文学散歩も楽しめます。しばらくの間、心地よい潮風に吹かれながら歩くと、重厚な建物が現れました。ここが「寶日館」です。寶客をもてなすため、明治時代中期から昭和時代にかけて建てられた近代和風建築は、その価値の高さから、国の重要文化財に指定されています。館内では、都で武士が乗るような馬や、僧侶やカエルを描いた木製品などを間近に見ることができました。「作者は不明ですが、もしかすると西行さ

んが描いたかも知れませぬ」と語る角谷さんからは、西行と二見浦を愛する熱い想いが伝わります。「寶日館」で、歴史ロマンを掻き立てられた後は、終点「R」二見浦「駅」へ。徒歩で12分程度の距離ですが、「夫婦岩」や二見興玉神社などを巡り、旅館街をそぞろ歩きするのも楽しいものです。西行が愛したまちを心行くまで散策してみたいかがでしょう。

問 二見浦西行実行委員会事務局  
TEL 0596-431-2231



「西行と伊勢二見とのかかわり」を記した案内板



御塩殿神社 本殿



御塩焼所(左側)と御塩汲入所(右側)

の北面か南面なのかは不明でしたが、発掘調査で、少しずつ解明されつつあります。

「この辺りは、豆石山の南面に当たります。地元では、あんによ」と呼んでいて、鴨長明が記した安養山とも一致します」と角谷さん。説明によれば、西行自身は二見浦のどこに住んでいたかを示しておらず、鎌倉時代初期の歌人『方丈記』の作者としても名高い鴨長明(1155-1216)が、旅日記に安養山に住んでいる旨を綴ったのが数少ない手がかりだったのです。それでも長年、かつての安養山(現在の豆石山)

### 御塩殿神社と 鴨長明歌碑

「次は御塩殿神社へ行きましょう。ここには鴨長明の歌碑もあります」と教わりながら、御塩殿神社に向かいます。同神社の歴史は古く、天照大神のご鎮座の地を求めて、倭姫命が二見を訪れた際、土地の神・佐見都日女が奉った堅塩を喜んだことに由来します。以来、伊勢神宮にお供えする御塩造りが古式

# 三重 の シンボル

亀山市

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



市の木  
スギ



市の花  
ハナショウブ

■ お問い合わせ ■

亀山市 総合政策部 総務課 法務グループ TEL 0595-84-5034

\*市・町名の50音順に紹介しています。

\*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 | 土井本家住宅(尾鷲市朝日町)

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧いただけます。  
☎ 経営企画部広報CSR課 TEL 059-223-2326(要予約)